

では、**テトスへの手紙**をお開き下さい。これを書いたのはパウロという人です。パウロが後継者であるテトスへ宛てた手紙ですので、これは牧会書簡と呼ばれるものです。他にも**テモテへの手紙**、これも牧会書簡です。パウロにはたくさんの後継者がおりました。若い牧師へ宛てた手紙。それが**テトスへの手紙**です。テトスという名前の意味は「あがめられる」という意味ですが、興味深いことにテモテという名前も「神をあがめる」という、似たり寄ったりといった名前でも興味深いですが、ただテトスはもともとギリシャ人であります。イエス・キリストを信じればユダヤ人もギリシャ人もなくなるわけですが、興味深いことに異邦人が、非ユダヤ人がパウロの後継者として大いに用いられていくところを見ることが出来ます。

で、この**テトスへの手紙**というのは、**テモテの手紙第一**とちょうど**第二**の間に、時系列で並べれば挿入される手紙であります。**テモテの手紙の第二**はパウロの絶筆となるものです。その直前に書かれたのが**テトスへの手紙**であります。執筆年代はおそらくは A.D. 65 年頃と考えられます。パウロが死の直前です。皇帝ネロによって首をはねられる数年前にこの**テトスへの手紙**をパウロは、後継者の若い牧師テトスへ宛てました。この時テトスは、クレテ島又はクレタ島の監督を務めておりました。クレテと新改訳ではなっておりますが、一般的にはクレタとも言います。今でもギリシャ最大の島ということで、観光名所にもなっております。貴重な遺跡群もたくさん残っております。そのクレタに沢山の教会があつたんです。当時の教会は家の教会でありました。それらを統括していたのが、パウロの後継者のテトスでありました。島の大きさは東西約 250 キロ、南北で言うと狭いところは 11 キロ、広いところは 56 キロという島です。そこに沢山の町があつて、そしてその町々に沢山の家の教会が点在しておりました。で、その島の中央には海拔 2,456 メートルのイダ山、又はイディ山という有名な山がありました。それはギリシャ神話において主神のゼウスが誕生したという、ギリシャ人にとっては非常にギリシャ神話の中では重要な舞台となる山であります。勿論ただの神話ですから事実とは異なるんですけども、そしてそのゼウスの息子のミノス王という王がやはりこのクレタ島を支配していたという、そういった由緒正しいとギリシャ人からしますと、その島においてテトスはキリスト教伝道を行っていたわけです。私たちの感覚で言うと、善光寺のお膝元で伝道するような、そんな感覚で捉えても良いかと思えます。

で、パウロはこの手紙をギリシャのニコポリという町から書きました。実際にニコポリという地名も**テトスの手紙**の終わりの方に出てきます。テトスにクレタ島の、またはクレテ島の牧会を任せて、そしてまだそこには教会は未成熟で、リーダーが立てられていない未成熟な状態でしたので、何とかテトスにまとめてもらおう、組織化してもらおう。そうでないとその**揺籃期**の時に、偽りの教えをもって家の教会をかき乱す、分裂をもたらす、そのような偽教師が入り込んできておりましたので、そのような偽教師に対してもしっかり対処するように、テトスが監督牧師として、また主任牧師として、しっかりとそのような異端的な教えを締め出すように、対抗するように、排除するように、警告も与えております。

で、テトスという人物像にも、もう少し詳しく迫っていきたいと思うんですが、先ほどギリシャ人だと言いました。伝承によるとテトスは、ギリシャ人の医者ルカの兄弟ではないかと。それは全く推測の域を出ないんですけども、ある人は、テトスはルカの兄弟ではなかったのかと言っております。テトスがギリシャ人であるという記述は、**ガラテヤ 2:3**に書かれておりますから、それはハッキリ分かっております。そして**テトスへの手紙 1:4**に、このテトスはパウロによって息子と呼ばれています。『**信仰による真実のわが子テトスへ。**』というふうには呼ばれていますので。勿論血の繋がった息子と言っているのではありません

ん。パウロはユダヤ人ですから、テトスはギリシャ人ですので、血の繋がった親子という意味ではなくて、霊の父という意味です。パウロを通してテトスは救われた、改心したということです。ただそのテトスはギリシャ人でしたので、一部の人たちは、ユダヤ人クリスチャンの中に「彼は私たちと同じように割礼を受けるべきではないか。」と。当時の初代教会はユダヤ人クリスチャンが中心でしたので、異邦人を加えるには抵抗を感じていたわけですからギリシャ人のテトスは、割礼を受けなければいけないというプレッシャーを受けていたわけですから。そんなことで教会の中に問題が生じた時に、初めての会議がエルサレムで開かれました。それがエルサレム会議という、**使徒の働き 15 章**に記録されているものです。おそらくそこにテトスも同行したと思われます。**使徒の働き 15:2** です。で、ならびに**ガラテヤ 2:1 ~3**にも記録されていますので、後で開いて確認して頂きたいと思います。異邦人のクリスチャンはどのように扱うべきか。ユダヤ人クリスチャンと同じように割礼を施すべきか、彼らに受けさせるべきか、否かと。そこに、もう既に律法主義の暗雲が立ち込めていたわけですから。ただパウロはそれに対して真っ向から反論したわけですから。「私たちは恵みによって救われるのだ。」と。行いによって救われるのではない。割礼によって救われるのではないと。そのようにしてテトスは非ユダヤ人でありながら、ギリシャ人でありながらも、パウロの庇護を受けながらも、パウロの有能な同労者として、後継者として用いられていくわけですから。

で、コリントの教会にパウロはこのテトスを遣わしました。ご存知のようにコリントの教会というのは問題だらけの教会でした。それに**コリント人への手紙第一、第二**を学び終えていますので、まだ学んでいない方は是非 CD やインターネットで聞いて頂きたいと思います。コリントの教会と言ったら問題だらけの教会。でもそんなところにパウロはこのテトスを遣わしたんです。その問題処理に当たったんです。つまりテトスという人物はそれほどまでにパウロに信頼されていたんです。このような問題だらけの教会の処理を任せられるほどテトスという人物は信頼に足る存在だったということです。**第二コリント**の中にテトスの名前が実に 9 回も言及されております。で、このコリントの教会でテトスはエルサレムの貧困で悩んでいるクリスチャンたちのために募金を集めました。ちょうど飢饉があつて初代教会のすべての教会の元となった母教会のエルサレムのクリスチャンたちが、特にユダヤ人クリスチャンたちが苦しんでいたわけですから。迫害も受けていました。そんな彼らに全世界から募金を集めて、そしてエルサレムに届けようではないかと。その働きの一端をテトスは担ったわけですから。そしてその後このクレテという、またはクレタと言う島に、またテトスはパウロによって遣わされて行きました。で、最終的にはテトスを、今この手紙を書いているギリシャのニコポリというところに呼び寄せて、そしてその後はダルマチヤというところ、今日のダルマチヤというところ、あの 101 匹わんちゃんのダルメシアン^①のその土地ですけれども、そこへ（今のクロアチアです。）呼び寄せて、そこでまたキリスト教伝道を行うわけですから。ボスニア・ヘルツェゴビナといった地域、旧ユーゴスラビアといった地域、そこでテトスは働くわけですから。でも、最後はこれも伝承によることなんですけれども、クレテ島のゴルティナと言う所で教会の監督を務めて、94 歳で天に召されていったと。その情報は聖書には記されておられませんので、あくまで信頼に足る古代のキリスト教の伝承によるものであります。いずれにしてもテトスという人物は、ギリシャ人でありながらも、若者でありながらも、非常に有能な伝道者で、パウロが全幅の信頼を置いていた若い牧者でもありました。完全にパウロの片腕、パウロの代理者として十分にその務めを果たした人物です。

内容は老練の熟練した牧師が、若い牧師に宛てた手紙ですから、**テモテへの手紙**と重複しているところが沢山あります。**第一テモテ**のコンデンス・バージョンというのか、それを要約したというふうな短いバージョンにしたのが**テトスへの手紙**というふうにも見ることが出来ます。今お話した事は**テトスへの手紙**の序論と言うことで、簡単にこの手紙の内容がどんなものであつて、そして最後強調していることは、「あなたは牧者として、牧師として常に健全な御言葉の真理に立って、この御言葉を最後の最後まで何があつても語り続けなさい。」と。それが最後パウロが言い残したことです。これはテトスだけではなくて、

テモテに対しても同じことをパウロは遺言のようにして語りました。

早速本文の方に目を移して頂きたいと思います。テトスへの手紙 1:1 『**神のしもべ、また、イエス・キリストの使徒パウロ**—私は、神に選ばれた人々の信仰と、敬虔にふさわしい真理の知識とのために使徒とされたのです。²それは、偽ることのない神が、永遠の昔から約束してくださった永遠のいのちの望みに基づくことです。』“神のしもべ”というタイトル、肩書きは、実はここにしか使われておりません。パウロは“キリスト・イエスのしもべ”という言い方はよくしましたけれども、ここで初めてパウロは“神のしもべ”というタイトルを使っております。非常に興味深いことに、ここだけにしか使われていない特別な自己紹介です。パウロだけが神のしもべではありません。私もあなたも、イエス・キリストを主と信じる者は皆、“神のしもべ”又は“キリスト・イエスのしもべ”です。イエスが主であるならば、当然あなたはそのしもべということです。常に私たちはその関係を忘れてはいけません。主従関係です。あなたは主ではないんです。あなたは神ではないんです。ですから常に私たちは、主人に伺いを立てて、「このことについて一体私はどうしたらいいのでしょうか。何をすべきでしょうか。」毎回毎回、問題が起こったら特にそうですけれども、その対処については主にまずは聞くわけです。相談するわけです。自分勝手に、自分よがりにより良かれと欲しているいろいろ自分で計画してみたり、自分で対処してみたり。まるで自分が主人であるかのように動いてしまう。祈りもせずに、考えもせずに動いてしまう。それは完全に主客転倒というものであります。それで自分でやったことで失敗したら、「主よ、助けて下さい。」と尻拭いをお願いする。それが主客転倒の信仰です。でも、初めから主に伺いを立てて、主に示された通り、命じられた通りにあなたが行うならば、後の責任はあなたではなくて主がとって下さいます。これほど安心なことはありません。もうあなたは重荷を抱える必要はないんです。何のプレッシャーもありません。主に聞いて、聞いた通りにあなたが実践するならば、主がすべてを責任をとってくれます。もうあなたの手から全てが離れるんです。お任せしていいんです。自分で握っていないかでもいいんです。失敗するんじゃないかとか、うまくいかないんじゃないかとか、何か失うんじゃないか、困ったことになるんじゃないか、却って問題を悪化させるんじゃないか。いろんな事を心配しなくてもいいんです。もしあなたが主に伺いを立てて、主に言われた通りのことを行うならば、たとえ状況が、目に見えるところがどうなろうとも、あなたは安心して「私はあなたの言われた通りのことをしました。だから後はあなたが責任をとって下さい。」と。別に神様に責任を^{なす}擦り付けるという意味ではありませんが、それだけの従順をあなたが示すならば、それだけ忠実に服従するならば、必ず主はあなたの人生の責任をとってくれます。これは快報です。そのことも、しもべというタイトルを皆さんも深く考えて頂く時に、“キリスト・イエスのしもべ”でも、“神のしもべ”でも同じことですが、是非あなたの主人はどれほどのお方なのか。神なんです。全知全能の神なんです。天地万物を造られた創造者です。その方があなたの主人だということを忘れてはいけません。家の主人は、あなたの夫は、あまり頼りないかもしれません。会社の主人、上司はあなたをがっかりさせるかもしれません。でも私たちの主人、神は、キリストは、私たちの花婿は、決してあなたをがっかりさせませんし、あなたに間違ったことを教えることもありませんし、あなたに損害をもたらすような事は絶対にいたしません。どういう状況になっても必ず責任をとってくれます。そしてあなたに最善をなしてくれます。ですから私も喜んで「神のしもべです。」と言いたいと思います。人に仕えるとか、人に縛られるとか、しもべだとか奴隷、そんなの嫌ですと。自由にやりたいんです。私が主人でいたいんです。私がすべてコントロールしてやりたいんです。私が握ってほしいんですと。そういう人は残念ですが、いつまで経っても平安で満たされる事はありません。いつもプレッシャーに悩まされています。^{おびや}脅かされています。『**神のしもべ、また、イエス・キリストの使徒パウロ**』そのパウロは若い牧師のテトスに対して、主要な働きをここにもう一度確認するように、まとめております。『**神に選ばれた人々の信仰と**（クリスチャンの信仰と）、敬虔にふさわしい真理の知識とのために使徒とされたのです。』これが牧師の務めでもあります。牧師は、

神に選ばれた人々、ここに集められている皆さんは皆神に選ばれた人々です。教会というところは、ギリシャ語で「エクレシア」と言います。それは選ばれた、召された人たちの集い・集まりであります。その人たちの信仰を養うこと。勿論これは御言葉によって養い、そしてその人たちの信仰が成長することを牧師は、羊飼いは、主たる働きとしなければいけません。そのためにパウロは召されている。そのためにテトスよ、あなたも召されているのだと。それがあなたの主たる働きである。それがあなたのメインとする本業である、と言っているわけです。

で、2 節に『それは、偽ることのない神が、永遠の昔から約束してくださった永遠のいのちの望みに基づくことです。』永遠の命というのは、死後の命のことではありません。勿論それも含めて良いんですけども、多くの人たちは永遠の命と聞くと、死んでからももらえるものとか、死んでから与^{あずか}るものだと思っています。受けるものだと思っています。しかし聖書の定義によりますと、永遠の命とはヨハネの福音書 17:3 に明確に示されております。大切な聖句ですから是非皆さんにも聞いて頂きたいと思えます。『その永遠のいのちとは、彼らが唯一のまことの神であるあなたと、あなたの遣わされたイエス・キリストとを知ることです。』十字架刑の前夜、ゲッセマネの園で祈られたイエスの大祭司の祈りの一節であります。これはイエスが父なる神に向かって祈っている言葉です。『その永遠のいのちとは、彼らが（弟子たちが）唯一のまことの神であるあなたと、あなたの遣わされたイエス・キリストとを知ることです。』神と神の御子イエス・キリストとを知ることです。これが永遠の命であると、イエス・キリストご自身が定義されました。もしあなたが御言葉を通して父なる神を知り、御子イエス・キリストを知ることになりますと、その時点であなたは永遠の命を豊かに味わうことになります。言い方を変えれば、それだけでもうあなたは天国気分を味わえるんです。死ななくても、もう地上に居ながら、あなたは天国を垣間見ることが出来るんです。天国の前味をあらかじめ味わうことが出来るんです。御言葉を通して神を知り、キリストを知ることが、まるで天国に上げられたような絶頂期気分をあなたにもたらししてくれるわけです。エノクという人のことを思い出して下さい。エノクは 300 年間神と共に歩いたんです。で、歩いているうちにいつの間にか神に取られたんです。携挙されたと言って良いと思えます。でもエノクは多分携挙された瞬間実感がなかったかもしれません。と言うのは、もう既に神と共に歩んでいるその歩みが、もう天国の歩みだったからです。ですから私たちが神と共に歩むならば、聖書を通してこの神を知り、イエス・キリストを知る歩みを続けるならば、もうその歩み自体が天国の歩みだという実感をあなたは知ることが出来ます。味わうことが出来ます。御言葉を通して永遠の命の望みというものを、既にあなたは与えられて、既にその望みを味わうことが出来るんです。これがクリスチャンの醍醐味です。死んでから初めて分かるものじゃないんです。もう死ぬ前から、イエス・キリストを信じたその瞬間から永遠の命は与えられるんです。ヨハネの福音書 3:16 にハッキリそう書いてあります。『神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。』イエスを信じるだけで永遠の命を持つことが出来るんです。ただ折角クリスチャンになっても、神を知る、キリストを知るといふ、つまり御言葉を学ぶということをしませんでした、この永遠の命はタダの宝の持ち腐れになってしまいます。与えられているのに全然活かさない、活かしていない、無用の長物のようなものです。クリスチャンなのに永遠の命を生きていない人たちが大勢います。地上に居ながら、天国気分を全く味わえていないクリスチャンたちがいます。まるで生き地獄を味わっているような、「何の喜びもありません。思い煩いでいっぱいです。不安で不安で仕方がありません。」とか、いろんなことを恐れて、いろんな誘惑に常に振り回されてしまう。敗北感に苛^{さいな}まれ、もう後悔しかない。是非、神を知ること、キリストを知るといふことが、永遠の命そのものなんだということを改めて知って、いつ地上での命を終えたとしても、何の後悔もなく、そのままそれこそ人生の延長のように、この地上から天国にそのまま引越すだけです。そのことを私たちはこのバイブル・スタディーにおいても味わっていきたく思います。

で、3節のところに『神は、ご自分の定められた時に、このみことばを宣教によって明らかにされました。私は、この宣教を私たちの救い主なる神の命令によって、ゆだねられたのです。—このパウロから、』御言葉の宣教という言葉が大切であります。それが牧師としての主要な働きだと先ほども言いました。テトスだけにではありません。パウロもその事を自分に向けて語っております。使徒の働き 6:4 読み上げますので聞いて下さい。『そして、私たちは（と語っているのは十二使徒のことです。）、もっぱら祈りとみことばの奉仕に励むことにします。』使徒は祈りとみことばのミニストリーに徹するべきだということです。その他の事は、使徒の下で仕える執事と呼ばれている人たちが実務の働きに当たり、使徒たちは霊的な働きに専念するようにと。同じく使徒の働き 20:26~32 もお読みしたいと思います。語っているのは使徒パウロです。『²⁶ですから、私はきょうここで、あなたがたに宣言します。私は、すべての人たちが受けるさばきについて責任がありません。²⁷ 私は、神のご計画の全体を（これは聖書のことです。全体を。今私たちは旧約新約合わせて 66 巻を主から頂いていますので、私たちにとって神の計画の全体と言うのは聖書 66 巻のことです。）、余すところなくあなたがたに知らせておいたからです。²⁸ あなたがたは自分自身と群れの全体とに気を配りなさい。（自分自身とそして群れの全体。教会全体に対して。パウロはこれをエペソの教会のリーダーたちにお別れのメッセージとして、決別メッセージとして語っています。あなた方自身と、そして教会全体、群れ全体のためにどうすべきかということを行っています。）聖霊は、神がご自身の血をもって買い取られた神の教会を牧させるために、あなたがたを群れの監督にお立てになったのです。²⁹ 私が出発したあと、狂暴な狼があなたがたの中には入り込んで来て、群れを荒らし回ることを、私は知っています。³⁰ あなたがた自身の中からも、いろいろな曲がったことを語って、弟子たちを自分のほうに引き込もうとする者たちが起こるでしょう。（あなた方自身の中、牧師と呼ばれる者たちの中からも、異端的な教えを説く偽教師たちが現れると警告しています。）³¹ ですから、目をさましていなさい。私が三年の間、夜も昼も、涙とともにあなたがたひとりひとりを訓戒し続けて来たことを、思い出してください。（これがパウロがやったことです。エペソで 3 年間、夜も昼も、涙とともにあなた方ひとりひとりを訓戒し続けてきたと。）³² いま私は、あなたがたを神とその恵みのみことばとにゆだねます。みことばは、あなたがたを育成し、すべての聖なるものとされた人々の中にあつて御国を継がせることができるのです。』

『神は、ご自分の定められた時に、このみことばを宣教によって明らかにされました。』と、パウロはテトスに言いましたが、同じことをパウロは毎回毎回別れ際には教会の指導者たちに同じことを語り続けました。第二テモテ 2:15 もお読みしたいと思います。第二テモテはテトスへの手紙の後に書かれたものです。パウロの絶筆となった手紙です。『あなたは熟練した者、すなわち、真理のみことばをまっすぐに説き明かす、恥じることのない働き人として、自分を神にささげるよう、努め励みなさい。』飛んで 4:2~5 もお読みします。『² みことばを宣べ伝えなさい。時が良くても悪くてもしっかりやりなさい。寛容を尽くし、絶えず教えながら、責め、戒め、また勧めなさい。³ というのは、人々が健全な教えに耳を貸そうとせず、自分につごうの良いことを言ってもらうために、気ままな願いをもって、次々に教師たちを自分たちのために寄せ集め、⁴ 真理から耳をそむけ、空想話にそれて行くような時代になるからです。⁵ しかし、あなたは、どのようなばあいにも慎み、困難に耐え、伝道者として働き、自分の務めを十分に果たしなさい。』これが牧会者の務めです。御言葉を宣べ伝えるということです。幸い私たちはこの御言葉のミニストリーを主から与えられて、1 週間に何度もチャンスが与えられています。水曜日、そして金曜日の午後も夜も、そして日曜日も。感謝なことです。

私の尊敬するもう天に召されてしまった牧師ですけれども、スコットランドのウィリアム・スティルという人がおりました。今でも生きておりますので、おりますと言った方が正確です。1911 年に生まれた方です。1997 年に天に召されていきました。このウィリアム・スティルという人が書いた『牧師の仕事』という本があります。その中に書かれていることを今皆さんに抜粋して読み上げたいと思います。今私たち

が丁度テトスへの手紙の1～3節のところで見ている内容と重なって、そして神に用いられた牧師が最後に残した重要な言葉というのは、いつの時代も変わらないのだということが見えてくると思います。で、そのウィリアム・スティルがその『牧師の仕事』という本の中で書いていることをいくつか抜粋して紹介したいと思います。

『多くの霊的に病んでいる人々が必要としているのは、ただひとつ、バランスの取れた良い栄養と規律ある日常生活です。私の主な治療室、診療室、世務時間、相談室、どう呼んでくださっても構いませんが、それは説教壇であり、教卓です。もしどうしても人々にこのことを理解してもらえなければ、彼らがキリストが望んでおられるような人にいつかなれるとはとても思えません。そういう人たちは、可能性はあるのに、満たされた幸せな、そしてもっと重要なことですが、役に立つ人間になることは決してないでしょう。そのようになれるのはただ御言葉の全体、そして御言葉のすべての部分のミニストリーによってのみだからです。例えば日常生活の実際的なこまごましたことについては、箴言をいくらかでも学べばそれこそ目が開かれ、値千金である事は受け合いです。このような御言葉のミニストリーを通して初めて人々は形成されるのです。それを拒めば人々はダメになってしまいます。私の仕事の上での大きな悲しみのひとつは、長年にわたりある人たちが私のミニストリーのもとで挫折してしまったことです。挫折の理由は私が彼らよりも強いと考え、私の背中にしがみついてさえいれば本来の彼ら以上になれる、すなわち神の御心によって彼らになるはずのもの以上になれる、と期待していたためでした。結局説教された御言葉、それを彼らは忌み嫌うに至ったのですが、それが彼らを傷つけたのです。御言葉が自分たちを傷つけることを知ると、彼らは御言葉を変更し、それを自分たちを癒す甘いシロップに変えるように要求しました。勿論そんなことは不可能でした。最もやさしい御言葉でさえも彼らをかき乱したからです。そして神の言葉の斧が振り下ろされ、素晴らしい豆の莖、すなわち彼らが無意識に前提としているものが地面に切り落とされると、かわいそうなジャックたちがそれと一緒に落ちてきました。(これはジャックと豆の木をもじった表現です。)私は繊細で感じやすい人々に取り返しがつかないほどの傷を負わせたと非難されました。私がある程度それに関わりがあった事は否定しませんし、心もひどく痛みますが、しかし彼らを傷つけたのは御言葉なのです。というのは彼らは魅力的だと考えた人間に心酔し、そうしていれば御言葉の命によって実が生じると信じていたからです。彼らは御言葉全体を求めてはいませんでした。人格の本当の香りをもたらすのは、御言葉だということを見てとることができずに、御言葉ではなく説教者の人格を吸収しようとした。人々が十字架なしの倫理を求めると同様、根は求めずに実だけを求めた人々がいたことほど、心が痛む事はありません。御言葉のミニストリーを進めるとこういったことすべてに直面しなければなりません。しかしながらそのようなミニストリーこそがクリスチャンの人格を形成するのです。ですから御言葉に養われた健康な人は、徐々に牧師を必要としなくなります。最後には牧師はお医者さんや看護婦さんと同様必要がなくなります。彼らは自分の様々な問題に対して解決を見出したのです。そしてそれよりも遥かに重要なことですが、天において初めて十分に解決される問題の場合は、それらを抱えたままで生きることを学んだのです。今や彼らは他の人たちに対して牧師の役割をし、他の人たちが御言葉を通して自分の問題を解決するのを助けることが出来るようになったのです。ですから迷っている当てにならないクリスチャンとは、名ばかりの魂を神の言葉という非常に堅実で確固とした栄養でではなく、何か他のものに基づいて取り扱う場合には、比較的表面的なレベルになるのもやむを得ません。彼らのレベルでの人生を理解するように努め、人生をより深いレベルで考えるように挑戦することは避けて、あちこちで人間的な助言をあれこれ与えるだけです。私の言いたいことがお分かりでしょうか。』

長くなりましたけれどもここで引用を止めておきたいと思います。“牧師を必要としなくなる”というのは、もちろんもう自分が牧師になって、教会に行かなくてもよくなるという意味ではなくて、牧師におんぶに抱っこではなくなると。牧師というひとりの人に依存しなくて、御言葉に依存するようになるという意味

です。そしてそれぞれが牧師という肩書きはなくても、牧師的な、牧会的な、御言葉によって人を励ましたり、戒めたり、養ったり、慰めたりというそういう働きを成長したクリスチャンは行えるようになってくると。それがウィリアム・スティルが言わんとしていたことであります。テトスもパウロを通して御言葉によって十分に養われ、訓練されて、そしてまたテトスも同じようにクレテ島の人たちに御言葉のミニストリーを行うようにと、パウロから激励されているわけです。

で、テトスの手紙 1 章の方にまた目を戻して頂きまして、4 節。『同じ信仰による真実のわが子テトスへ。父なる神および私たちの救い主なるキリスト・イエスから、恵みと平安がありますように。』英語の欽定訳聖書では『恵みと憐れみと平安』“憐れみ”という言葉がそこに含まれております。「恵みと平安」という挨拶はパウロの定番の挨拶でしたけれども、それに“憐れみ”が加わっております。テモテの手紙にも同様の表現があります。興味深いことに若い牧師には、特にこの“憐れみ”が必要であるということが強調されているのではないかと思います。一般的なパウロ手紙には、「恵みと平安」とありますけれども、後継者の若い牧師のテモテやテトスに対しては、そこに“憐れみ”を含めているんです。若い牧師は“憐れみ”を必要とします。なぜならば失敗するからです。彼らには憐れみが必要です。最初から熟練した牧師になるわけではありません。勿論年が若いからといって、私たちは軽んじられてはなりませんので、聖書朗読にしても生活態度にしてもすべての点で信者の模範にならなければなりません。ただパウロは知っていました。自分も若い頃は失敗したんだと。ですから若い牧者たちに対しては“憐れみ”をパウロは強調したわけです。私も 40 代に入って微妙な年齢になってきました。若いのか、もう中堅牧師なのか、どっちなのかと。まだまだひよっ子だと私は思います。“憐れみ”が必要です。でも、いつまでも未熟なままではいけません。憐れみが不要になる日はやってきませんけれども、常に主の前に謙^{へりくだ}っていくべきではあります。私たちには皆、憐れみが必要です。皆失敗するからです。牧師でも失敗するんです。

そして、もう一つ皆さんに気に留めて頂きたいことは、先ほどテトスはパウロのミニストリーを通して救われたと言いましたけれども、皆さんにもそのような霊の子供たちが与えられていると思います。クリスチャンとして御言葉によって養われると、羊たちは皆丸々健康に太ってきます。御言葉によって養われないと羊たちはやせ細っていて、とてもじゃないけれども赤ちゃんを産めるような体力はありません。でも、御言葉によって養われると必然的に羊は体力を与えられて、そして新しい命を生み出す活力が備えられていきますので、どんどんどんどん新しい子羊たちを生み出すことが出来るようになります。この御言葉のミニストリーは、ただ単にクリスチャンたちを御言葉によって頭でっかちにするのではなくて、この御言葉のミニストリーはクリスチャンたちを、子羊を生み出すところの健康な多産な羊として、役に立つ者として整えていく、満たしていくというものであります。ですから御言葉によって養われていけば、霊的に成熟していけば、あなたもまた子羊たちを生み出すところのクリスチャンになります。あなたも牧会的な働きを担うことが出来るようになります。それがこの御言葉のミニストリーの素晴らしい祝福であります。ただ聖書を勉強しているではありません。沢山の子羊を生むためにも私たちはここで養いを受けているんです。やせ細ってガリガリな病的な羊に鞭を打って「お前たちは出て行け。教会から飛びだして行って、そして教会に 1 人でも多くの人たちを連れて来なさい。伝道しなさい。トラクトを持って路傍伝道しなさい。家々を回って個別伝道しなさい。そして沢山の人を教会に連れて来なさい。沢山の改心者を生み出すように。」やせ細っている羊たちにいくらムチ打っても、彼らには余力がありません。もう自分のことで精一杯です。体力がないんです。しかも病氣です。そんな羊たちが子羊を生み出すことは出来ないわけです。ですから伝道も大切ですが、その前に私たちはしっかりとクリスチャンは皆御言葉によって養われていく必要があります。

で、『父なる神および私たちの救い主なるキリスト・イエスから』とありますが、父なる神と子なる神イエス・キリスト。残る聖霊なる神は一体どこへ行ってしまったのか。考えたことがあるでしょうか。父な

る神とイエスキリストから恵みと平安がありますように。こういう挨拶はよく見られますけれども、毎回毎回聖霊が省かれているようです。どうして聖霊は入ってないんですか。三位一体の神なのに。忘れちゃってるんですかと思うかもしれません。理由はヨハネの福音書 16:13~15 節にイエス・キリストによって説明されております。『¹³しかし、その方、すなわち真理の御霊が来ると、あなたがたをすべての真理に導き入れます。御霊は自分から語るのではなく、聞くままを話し、また、やがて起ころうとしていることをあなたがたに示すからです。¹⁴御霊はわたしの（イエス・キリストの）栄光を現わします。わたしのものを受けて、あなたがたに知らせるからです。¹⁵父が持っておられるものはみな、わたしのものです。ですからわたしは、御霊がわたしのものを受けて、あなたがたに知らせると言ったのです。』聖霊なる神は自分から語ることは致しません。聖霊なる神はいつでもイエス・キリストのものを受けて、イエス・キリストの栄光を現すわけです。聖霊は自分の栄光を現すことは致しません。聖霊は前面に出て行くことを致しません。自分がスポットライトを浴びるということを聖霊は嫌います。ですから、このテトス 1:4 にもあるように、『父なる神および私たちの救い主なるキリスト・イエスから、恵みと（憐れみと）平安がありますように。』聖霊は敢えて自分の名前を出さないわけです。控えめな方と言って良いと思います。常に聖霊はイエス・キリストの栄光を現します。で、イエス・キリストは父なる神の栄光を現すわけです。この聖霊がパウロを通してこのテトスへの手紙を書いたんです。聖書はすべて神の靈感によって書かれたものです。聖書は聖霊によって書かれたんです。でも聖霊は敢えて自分の名前を出しません。「聖霊様、聖霊様。」と言って聖霊ばかりを前面に出して、聖霊を強調し過ぎているそういう教会があります。そういうグループがあります。時に私は本当にそれは果たして神聖な聖霊の働きかどうか首を傾げることがあります。聖霊のことばかり。あるグループは「父なる神とイエス・キリストをことばかり語られてきて、聖霊についてあまり教会は語ってこなかった。だからもっと聖霊を前面に押し出して、今は聖霊の時代だから。聖霊に呼びかけ、そして聖霊の働きを私たちは強調すべきである。」と。そういうグループが聖書から逸脱していきます。皮肉なことに聖霊が、聖霊ご自身が聖書を書かれたにもかかわらず、「聖霊の働きは聖書を超えていくんだと。すべての聖霊の働きは聖書では説明しきれない。なぜならば聖霊は大きな方だから。神の御言葉なんていう小さな箱に収まるような方ではないから。」至極もつともなまことしやかなことを言いますけれども、でも聖霊が聖書を書いたんです。自分が書いたことを越えて聖霊が働くとは、私は思いません。聖霊が聖書を否定するようなこと、聖書から逸脱するようなことをなさるとは、私はとても思えません。ですから気をつけて下さい。あるグループは、ある教会は、「聖霊、聖霊。聖霊様、聖霊様。」と躍起になって聖霊のことを強調しますが、聖霊ご自身の方ではそれを最も忌み嫌っているんだということを覚えて下さい。むしろ聖霊はイエス・キリストに栄光が帰せられることを一番お望みであります。イエスに栄光あれ。イエス・キリストが行うことを、聖霊は行います。ですから「これは聖霊の働きです。」と言った時に、「本当にイエスもそんな働きをしたんでしょうか。」と。狂気じみたように飛んだり跳ねたりしながら、床をゴロゴロ転がり回ったり、絶叫したり。イエス・キリストがそんなことをなされたでしょうか。イエス・キリストがステージに立って大勢の群衆の前で奇跡を行い、不治の病の人を癒し、歩けなかった人を歩かせて、そして自らに栄光を帰すということをなされたでしょうか。イエスが奇跡を行なうたびに、群衆が父なる神をあがめたと。それが当時の人たちのリアクションでした。私は聖霊の器ですと。この集会に来なければあなたは癒されませんか。気を付けて欲しいと思います。

で、テキストに戻って頂きましてテトスへの手紙 1:5。『私があなたをクレテに残したのは、あなたが残っている仕事の整理をし、また、私が指図したように、町ごとに長老たちを任命するためでした。』クレテ島にはたくさんの町がありました。百町島と呼ばれる程、クレテ島には沢山の町がありました。町ごとに家の教会が点在していたわけです。でも、それらの家の教会は皆未成熟のものばかりで、まだリーダーがたっていないんです。長老たちというのは教会のリーダー。この後に監督と言う肩書きも出てきます

が、長老も監督も同様に教会のリーダーです。それは今の牧師にあたる立場であったり、副牧師であったり、また伝道者であったり、役員であったり、執事であったり。呼び名はいろいろ教団教派によっても異なりますけれども、何れにしても教会の指導者のことでもあります。そのように教会の指導者、リーダーをたてるということも、これも牧会者としての重要な働きであります。クレテ島には既に沢山の教会が、家庭集会と言った方が正確かもしれませんが、そうしたグループは沢山生まれていました。ただリーダーが不在という状態でした。その源流をペンテコステの祭りの時に見ることが出来ます。聖霊が降^{くだ}ってエルサレムで新しく教会が、初めての教会が産声をあげた時です。使徒の働き 2:11。『ユダヤ人もいれば改宗者もいる。またクレテ人とアラビヤ人なのに、あの人たちが、私たちのいろいろな国ことばで神の大きなみわざを語るのを聞^いこうとは。』と。ペンテコステのお祭りに世界中からユダヤ教徒ならびにユダヤ教の改宗者たちが、お祝いに集まっていたわけです。そこに聖霊が降って 120 名もの弟子たちが、まだ習ったこともない外国の言葉で福音を語り始めたわけです。その中にクレテ人も含まれていました。ですからこの時におそらくクレテ人の多くは福音に触れて、改宗して、クリスチャンになって、そして後に地元、クレテ島に帰って行って、そこで家庭集会が自然発生したというふうに思われます。ただ、霊的リーダーが不在の状態でしたのでパウロがテトスを立てて、テトスを通して訓練をし、そして町ごとの家々に教会がありましたので、「指導者をたてるように。訓練するように。」ということで、ミッションを与えたわけです。

で、6 節に『それには、その人が（長老たち、教会のリーダー。その人が）、非難されるところがなく（この“非難されるところがなく”というの是指をさされることがないということでもあるんですけども、完全無欠という意味ではありません。明らかに人格に問題があるとか、明らかに振舞いに問題があるとか、人間性が疑われてしまうとか、普段の生活が全くなっていない。それは人の目にも明らかで誰もがその問題を指摘するような、そういう部分がないということです。皆が皆あなたのことを好いてくれるわけではありません。皆が皆あなたのことを評価してくれるわけではありません。ただ誰の目にも「これは問題でしょう。」と指をさされるようなことがあるならば、もう既に不適格であるということです。）、ひとりの妻の夫であり（これも大事なポイントです。ひとりの妻の。二人の妻ではダメです。ひとりの妻の夫である。不倫をしています、論外です。ですから性的不道德の罪においてクリーンであるということ。）、その子どもは不品行を責められたり、反抗的であったりしない信者であることが条件です。』牧師の子供たちが性的不道德の罪に陥っている。または親に対して反抗している。既にそれだけで不適格だと言っているわけです。まるで切り捨てられてしまうような厳しい条件に思うかもしれませんが、決してネガティブに捉えないで欲しいと思います。自分の子供たちが自堕落な生活をしている。反抗的な態度を露^{あらわ}にしている。もう親の私は決してミニストリーにおいて神に用いて頂けないのかと。何の奉仕も出来ないのか、何の働きも任せて頂けないのか、とがっかりする前に、これをネガティブに捉える前に、いやそうではないんだと。

「あなたは確かに公の場で、教会の霊的リーダーとして、人前に立つ者として働くことは出来ない。なぜならば、あなたは常に人々の模範でなければいけないから。そしてあなたは多くの人に影響を与える立場になるから。」でも、もしあなたの家に不品行の罪を行っている子供がいるならば、また反抗的な子供がいるならば、あなたのミニストリーは家庭であると言っているんです。「もうお前には資格がないと。残念だけれども。雇われません。」という話ではなくて、これをもっと積極的に捕らえて、あなたのミニストリーはむしろ家庭にあるんだと。クリスチャンの家庭にもこのような痛ましい問題がたくさんあります。クリスチャンと呼ばれる子供たちも不品行の罪に陥ります。“不品行”と言うのは、性的不道德全般の罪です。婚前交渉、婚外交渉、そして“ポルネイヤ”という言葉ですから全てポルノに関わるような罪。クリスチャンでありながらも反抗的である。『反抗的であったりしない信者である』とあります。「反抗的である不信者」とは言っていない。『信者である』と言っています。信者なのに反抗する。信者なのに性的罪を犯

すと。これが現実であります。ただ、そんな子供たちに対してあなたにはミニストリーが与えられている。それは、公の場、教会の表でやることではなくて、あなたの家で為す家庭のミニストリーであると言われていたわけです。ですから決してがっかりしないで下さい。私たちの優先すべき職場は家庭なんです。自分のホームです。

第一テモテ 3:5 も読みたいと思います。第一テモテはテトスへの手紙と似通っているところがあります。『自分自身の家庭を治めることを知らない人が、どうして神の教会の世話をすることができるでしょう。』と。まずは家庭を治めることです。で、治めたならばあなたには資格が与えられるわけです。家庭はクリスチャンリーダーのための訓練所と言って良いと思います。家庭で失敗するならば、教会でも失敗します。家庭で成功すれば、教会でも成功します。ですから、家庭で失敗しているのに、教会で成功出来るとは思わないで下さい。

『神様は他の人との親しい交わりを通して人を愛し、癒しを行われる。家庭での感情や情緒的な態度がその家庭の信仰体験の真髄であるのはこのためである。』ドナルド・スチュワート・ウィリアムソンという人の言葉です。

『また信仰的な言葉が子どもにとって価値を持つのは、家庭での経験がそれらの言葉を裏付ける時だけである。』グサっとくるかもしれません。信仰的な言葉が子どもにとって価値を持つのは、あなたがいくら神様の話をしても、聖書の言葉を引用して見せても、家庭での経験がそれらの言葉を裏付ける事実がなければ、子供は聞く耳を持ちません。キャノン・ラムという人の言葉です。

そして『家庭と信仰は同列に置くべき言葉である。家庭は信仰が腰を据えるべき中心の座であり、信仰は家庭を形作る神聖な要素なのである。屋根のない家であっても、信仰のない家庭ほど冷たくはない。』ホイス・ブッシュネルという人の言葉です。

『親は子供に行くべき道を教え続けるだけでは十分ではない。まず親自身が子供が「こうあって欲しい。」と望む者にならなければ、影響を及ぼすことができないのである。親はただ道を知り、それを指し示すだけではなく、自らもその道を歩まなければならない。子供にただ信仰について語り、教会へ送り出すだけでは、子供は親が語ったことを信じ教会にしっかりと結びついていく事はないだろう。子供が、神・愛・慈み・赦し・受容・御言葉の真理を理解出来るのは、様々な関係、とりわけ家族関係の中でそれを経験する時なのである。』と、ジョン・M・ドレシャー。

『親が子供にどんなに良い事を教えたとしても、それと同時に悪いお手本を示すなら、一方の手に食物を渡し、もう一方の手に毒を持たせるようなものである。』ジョン・バルダイ。

これらの言葉は週報にも書きましたので、皆さんも記憶に新しいと思います。家庭と信仰は同列に置くべき言葉なんです。家庭を治めることを知らない人は、教会を治めることを知らない人です。家庭も教会も共に神の家であります。

で、7節に『⁷監督は（これも長老と同義的に使われております。監督は）神の家の管理者として（勿論これは教会のことです。）、非難されるところのない者であるべきです。（共通しています。）わがままでなく、短気でなく、酒飲みでなく、けんか好きでなく、不正な利を求めず、⁸かえって、旅人をよくもてなし、善を愛し、慎み深く、正しく、敬虔で、自制心があり、⁹教えにかなった信頼すべきみことばを、しっかりと守っていなければなりません。それは健全な教えをもって励ましたり、反対する人たちを正したりすることができるためです。』特に『酒飲みでなく、けんか好きでなく、不正な利を求めず』という部分、これは実はテトスが牧会していたクレテ人の人たちの特徴でもあります。酒飲みなんです、クレテ人は。喧嘩好きなんです、クレテ人は。そして不正な利を求める、これもクレテ人の特徴です。ここに書かれている事は特殊なことではありません。クリスチャンとして当たり前のことばかりです。ですからこのことを私たちは、2章以降にも見ることが出来ます。何もこれは教会のリーダーに対しての高い倫理基準と言うも

のではありません。クリスチャンならば当然求められるべきものであり、クリスチャンであるならばそれらが自然になされるべきであるというものばかりです。「私はリーダーじゃないから、こんなふうには出来ません。」とか、「それはもう他人事^{ひとごと}です。」というものではありません。それは**2章**以降を見れば分かります。老若男女に対してパウロは、長老や監督に対してと全く同じことを求めています。同じ基準をすべての教会員に求めています。クリスチャンとはこうあるべきである。

で、**9節**のところにもう一度目を留めて欲しいと思いますが、『**教えにかなった信頼すべきみことばを、しっかりと守っていなければなりません。**』御言葉をただ教えるだけではなくて、まずあなたが御言葉を守っていないなければならない。実行していなければならないと、『**それは健全な教えをもって励ましたり、反対する人たちを正したりすることができるためです。**』あなたが先輩クリスチャンとして、親として、お爺ちゃん・お婆ちゃんとして、まずはしっかりと御言葉をあなたが守って、そしてその健全な教えをもってあなたを今度は励ますことが出来ます。そして反対する人たちを正すことも出来ます。

で、**10節**には偽教師のことが書かれております。未熟なリーダー不在の家庭集會に、偽教師たちがはびこって脅威となっていました。『**実は、反抗的な者、空論に走る者、人を惑わす者が多くいます。特に、割礼を受けた人々がそうです。**』“割礼を受けた人々”と言うのはユダヤ人のことです。彼らは律法主義をもって恵みを否定する者たちです。

11節に『**彼らの口を封じなければいけません。彼らは、不正な利を得るために、教えるはいけないことを教え、家々を破壊しています。**』偽教師の特徴というのは、非常に分かりやすいです。彼らは常に利得を求めています。お金の話を必ずします。献金しなさいとか、あなたの支援が必要です、サポートが必要ですとか。やたらめったらお金のことを必ず口にして、それを要求します、請求します。ですからそのことを皆さんも一番分かりやすい見分けるサインとして、いつも心に留めておいて頂きたいと思います。「**家々を破壊する**」と。これは家の集會、家庭集會を破壊する働きをします。

で、**12節**に『**彼らと同国人であるひとりの預言者がこう言いました。「クレテ人は昔からのうそつき、悪いけどもの、なまけ者の食いしんぼう。」**』これはクレテ人の、クレタ島出身のひとりの預言者と言われておりますけれども、この預言者というのはギリシャの7賢人の一人とされるエピメニデスという人の言葉です。それをパウロが引用したんです。あの有名なアリストテレスだとか、キケロという人がこのエピメニデスと言う人を預言者と呼んだわけです。勿論聖書の預言者ではありません。紀元前6～5世紀の人なんですけれども、詩人でもあり哲学者でもあるこのエピメニデスと言う人が、「**クレテ人は昔からのうそつき、悪いけどもの、なまけ者の食いしんぼう。**」だと、同国人のことをこんなにも辛辣に、またはこんなにも的確に評価したわけです。これがクレテ人の島民性である。島の住人の性質である。国民性のようなものです。民族性のようなもの。“うそつき”と言うのは特にクレテ人はいつもイデ山、イディ山というギリシャ神話の主神ゼウスが生まれたというその山の話をして、実在しないゼウスのことをいつも自慢ばかりしていたわけです。“**悪いけどもの**”完全にケダモノのような性的倒錯、性的不道德の罪を行っていたわけです。“**なまけ者の食いしんぼう**”そういった悪名が世界中に轟いていたわけです。先にも触れたように、**7節**のところにも『**酒飲み、けんか好き、不正な利得を求める**』という話をして、それらがすべてクレテ人の特徴であるというふうに言いました。パウロはテトスが牧会する、または伝道するその対象について、クレテ人とはこういう連中なんだと、すごい厳しい言葉です。辛辣な言葉です。もちろん自分の、パウロ自身の言葉ではないんですけれども、パウロもそのことを本当だと言っています。**13節**『**この証言はほんとうなのです。**』と。エピメニデスが言う通り、クレテ人はうそつき、悪いけどもの、なまけ者の食いしんぼうだ。テトスよ、あなたが伝道するそのクレテ人はこういう連中だ。教会に来る信徒は皆こういう連中だと、パウロは言ったわけです。私たちはどういう人を相手に御言葉を語るのか。教会に来る人たち、どういう人たちが集まってくるのか。考える必要があります。パウロが言いたかった事は、勿論このクレ

テ人をただ見下げて、軽蔑して断罪するためではありません。そうではなくて、テスに対して「あなたは今がっかりしているかもしれない。一生懸命伝道しても、命を注ぎ出すようにして牧会しても、反応がイマイチ。皆反抗する。皆自堕落な生活をする。御言葉に耳を傾けない。健全な教えではなくて、不健全な教えの方に皆耳を傾けていく。むしろ偽教師の教えになびいていく。いくら頑張っても、いくら時間をかけても、寝る間を惜しんでも、それでも全然このクレテ人は反応しない。全然変わらない。全然成長しない。」そんなガッカリした、意気消沈したテスに対してパウロは、クレテ人は嘘つきなんだと。だからがっかりしなくてもいい。クレテ人は悪いけどものなんだ。クレテ人はなまけ者の食いしんぼうなんだから、いちいちがっかりしなくてもいいと。彼らはそういう人たちなんだ。もちろんこれはクレテ人のことだけではないと思います。すべての人は罪を犯していますから、罪人であります。すべての人は嘘つきです。ある人は「人間は嘘をつく動物である。」と言いました。動物は嘘をつきません。人間だけです。私たちは悪いけどものです。野獣です。人を平気で噛み付き、引き裂き、そして誰とでも構わず寝たりします。ものすごい性的に不道徳です。なまけ者の食いしん坊です。飽くことを知らない欲情・欲望に駆られて動く人間であります。それは罪人のことを描写してるわけです。

13 節『この証言はほんとうなのです。ですから、きびしく戒めて、人々の信仰を健全にし、』私たちはみな罪人です。あなたが伝道の対象としているのは、このような罪人なんです。だからあなたもいちいちがっかりしないで下さい。一生懸命福音を語っても、どんなに分りやすく伝えようとしても、こんなにも礼を尽くして、自分の生活を犠牲にして、本当にこの人のために、救われて欲しいからと熱心であっても、相手はあなたの熱意を全く汲み取ろうともしません。あなたの思いやりを踏みにじるようなことを、平気で言ったりやったりします。テスはがっかりしていたんです。そんなテスに対してパウロはハッキリものを言いました。クレテ人はこういうものだと。

私は信州人ではありません。皆さんも勿論知っていると思います。初めて信州に来たときにはかなり大変でした。この人たちを理解するのは大変でした。信州で生まれ育つとなかなか自分のことを冷静に見つめて、自分はどのようなタイプなのか、性質なのか。信州の、長野県の県民性だとか、そういったことにあまり意識は行かないかも知れませんが、外から見ると面白い評価が下るわけです。例えばですけれども、『不思議の国の信州人』という本を皆さん読んだことがあるでしょうか。結構人気を博して信州の人も読んだそうですけれども、そこには「信州人は老若男女、県の歌である『信濃の国』の6番まで歌える。」と。その人はみんな信州人であると。長野県を愛して止まないわけです。私は静岡県出身ですが、県の歌など知りもしません。で、信州人は理屈っぽくて議論好き。そして潔癖であると。それはどういう意味かというと、生真面目で独善的でプライドが高い。そして冗談が通じない。それで私のジョークに皆笑ってもらえないのか、と思っていますけども。でもこれも勿論長野県というのは非常に大きな縦に長い県ですから、昔は一つの県だった、一つの国だったわけではないので、それぞれ北と南、又は真ん中、全然違うわけですが、東京へのコンプレックスが強いとか。あとは南北で仲が悪いとか。県庁の位置をめぐって、長野と松本の事ですが、他にもイナゴ、蜂の子、ザザ虫といったゲテモノを食べる。これが信州人であるという、まあいろいろありますけれども。ここは長野市ですから、北信でありますので、また中信とか南信とか東信、そういった所とはやっぱり違うと思います。他と比べるとどちらかと言いますと、北信はやっぱりちょっと保守的な感じ。生真面目という方です。議論好きという感じはあまりしません。むしろ「質問はありますか。」と言っても、質問をしないとか。「皆さんいろいろお分ち下さい。」と言っても、黙っていたりとか。そういうことが多いですけども、それが外から見た信州人の特徴と、または県民性といったものとして、これは勿論絶対視すべきものとも言えないですけども、結構射ているものも多いと思います。そういうそれぞれの気質とか性質というものがありますので、時に手応えを感じないとか、どうもこの人たちに言っても全然通じているように感じないとか、反応が悪いと

か、うまくいかないとか、そういう時にもパウロははっきりとクレテ人の性質を見てとって、「うそつき、悪いけどもの、なまけ者の食いしんぼう」だから、そのことをテトスよ、あなたもしっかりと踏まえた上で、めげずに忍耐をもって、そして御言葉のミニストリーを続けるようにと言っているわけです。そんな彼らに対して厳しく戒めると。厳しく接する必要があります。もう、そういう県民性だから仕方がない、そこで済ましてはいけなと。ただ、厳しく戒めるのは、目的がはっきりしています。それは人々の信仰を健全にするためです。人々の信仰を健全にするためには、ときに厳しく戒める必要があります。その人の気質、性質、性格、又はその地域の地域性だとか、県民性、民族性、国民性、そうしたことで振り回されてはいけなと。むしろ彼らの信仰を健全にするためには、昔からの伝統であろうと、染み付いたものでであろうと、性格であろうと、厳しく戒めるように。それは何ら言い訳にも、正当化されるような理由にもならないと。そのまま良いという話ではないということです。

で、14 節に『ユダヤ人の空想話や（空想話という言葉も時折テモテの手紙にも出ていますけれども）、真理から離れた人々の戒めには心を寄せないようにさせなさい。』と。聖書に書かれていないようなことをすべて空想話と言っているわけです。人が勝手に思いついた話。10 節のところの『空論に走る者』というのは、直訳すると単なる“おしゃべり”です。口達者、やたらめったらべらべらしゃべるんですけども、でも中身がない話です。で、“空想話”というのは、真理から離れる、又は真理を拒否する人たちの話です。真理から離れて、真理を拒否する人たちは必ずと言っていいほど空想話をします。自分の勝手なイメージーション、勝手な自分の信仰化、勝手な神を空想して信仰するわけです。彼らには引き寄せられないように注意しなさいと。

で、15 節で『きよい人々には、すべてのものがきよいのです。しかし、汚れた、不信仰な人々には、何一つきよいものはありません。それどころか、その知性と良心までも汚れています。』きよい、英語では“pure”という言葉が使われています。“pure”な人々には、すべてのものが“pure”なのですと。しかし汚れた、“pure”でない不品行な人々には、何一つきよいもの“pure”なものはありませんと。混じり気がないということです。純真なもの、“pure”ということです。健全な信仰は、混ぜものがされておりません。“pure”な教えです。でも、不健全な教え、真理から離れて、真理を拒否する人たちの教えというのは、必ず混ぜものがされています。聖書の御言葉も勿論使われます。でもそこには混ぜものがあって、たった 1 滴の毒でも混ぜていけば、それは有害なんです。聖書の言葉も使われていても、たった 1 滴の毒が含まれているだけで、それは有害な教えとなるわけです。

そして参照して頂きたい箇所がローマ 16 : 19。表現は違うんですけども、同じようなことをパウロが語っています。『あなたがたの従順はすべての人に知られているので、私はあなたがたのことを喜んでます。しかし、私は（その後に注目して下さい。）、あなたがたが善にはさとく、悪にはうとくあってほしい、と望んでいます。』クリスチャンは、「善にはさとく、悪にはうとくあってほしい」と。「きよい人々には、すべてのものがきよい。汚れた、不信仰な人々には、何一つきよいものはない。」と。クリスチャンは、悪に対してはうとい、ということ意識して頂きたいと思います。「最新の流行、今の流行、それに対してうといと、世俗の人たちと周囲の人たちとは会話が出来ません。共通の話題がないので、私ももう少しこの世の流行だとか、聖書では勿論それらは決してきよいものでもない。むしろ汚れたものとされているものでも、私は知っておく必要があるんじゃないでしょうかと。世離れたような、世知に長けていない、そんな状態では効果的な伝道は出来ないのではないのでしょうか。彼らと少なくとも同じレベルで、彼らの関心事をしっかり把握した上で語らなければ、話が通じないのではないのでしょうか。まずは彼らと友達にならなければ、福音も伝えられないのではないのでしょうか。」とか、いろいろなことが言われておりますけれども、聖書ははっきりとクリスチャンは「善にはさとく、悪にはうとくなければいけない」と。もうそのような言い訳は一切せずに、クリスチャンは悪にはうとくあるべきであります。きよい人々には、すべて

のものがきよいんです。ですから、もしあなたがきよくないもの、汚れたものに目を留めてしまうならば、あなたもまた汚れていきますから、注意して下さい。本当は、あなたの中では、あなたは最新の流行を知っておきたい、ただそれだけのことです。そうすれば馬鹿にされないから。それがあなたの動機なんでしょう。伝道したいから、効果的に福音を伝えたいから、そんな事は本当は理由ではないと思います。ただ単に時代遅れだとか、仲間外れにされたくないからとか、友達を失いたくないからとか。それがあなたの本音だと思います。もしあなたが、効果的に伝道したい。だからいろいろな最新の流行を自分も追っていたいと、それがあなたの真の動機であって、それがあなたの目的・主張であるならば、あなたは全面的に自分がクリスチャンであることを公にして、そしていつ何時でも、どんな会話にもイエス・キリストのことで持ち出して福音を語るべきであります。一緒になって最新の流行を楽しんだり、遊んだり、そして一切イエス・キリストの名前も出さないとか、そこで罪のことを語らないとか、悔い改めを語らないとか、地獄を語らないとか。ただ友達になっておけば、いつかチャンスがあれば福音を語る機会もあるかもしれない。でも仲が悪かったら、疎遠になってしまえば、仲間外れにされれば、そういう機会も無いだろうから、とりあえずはまずは黙って一緒になって彼らと遊びましょう。考えて欲しいと思います。その日は一生かかっても来ないかもしれません。ノンクリスチャンのお友達という人たちは、あなたのことを見て「クリスチャンは何ら俺達と変わらない。私たちと何ら変わらない人たちなんだ。」と。特別でもなんでもない。何の魅力もない。何の違いもない。聞く耳は持たないと思います。その程度だということです。教会に行ってもその程度。聖書なんか読んでいてもその程度。神なんか知っていても私たちと何ら変わらない。であれば、まったくあなたには魅力も感じないと思います。ですから注意したいと思います。

で、最後 **16 節**を見て終わりたいと思います。『**彼らは、神を知っていると口では言いますが、行ないでは否定しています。**(名ばかりの信仰者です。) **実に忌まわしく、不従順で、どんな良いわざにも不適格です。**』神を知っているとは口で言うんですけれども、行ないでは否定しています。もちろんこれは文脈上偽教師のことですけれども、特にこの「**神を知っている**」の“**知っている**”は、**ヨハネの手紙**の学びでもお伝えしたように、これは“**グノーシス**”という知識。ギリシャ語で知識のことを“**グノーシス**”と言いますが、それが初代の教会に入り込んでいた異端でありました。グノーシス主義と言うものです。彼らは、特別な知識によって人は救われるんだと。聖書だけでは不十分である。聖書プラスアルファと言うような教えです。聖書の健全な教え、それでは人を救うことにはならないと。

今日はこの **16 節**で終わりたいと思うんですけども、実際には **2 章 1 節**もそこに繋げて読んで欲しいと思います。『**しかし、あなたは健全な教えにふさわしいことを話さない。**』と。本当はそこまで **1 章**に含めたいわけです。で、**2 章 1 節**からは『**老人たちには、…**』というふうに入りたいわけですが、章と節は神の靈感によって設けられたものではありません。これは便宜上人が作ったものですから、この章節の分かれ目で私たちは区切ったりして、そこで文脈の流れというものを切ってはいけません。対照的に『**彼らは、神を知っていると口では言いますが、行ないでは否定しています。実に忌まわしく、不従順で、どんな良いわざにも不適格です。しかし、あなたは健全な教えにふさわしいことを話さない。**』と。ですから、健全な教えと言うのは勿論ピュアな聖書の言葉です。混ぜ物のない、混じり気のない純粋な聖書の言葉ですが、その言葉を拒否し、その真理の言葉から離れている者たちは、神を知っていると口では言うんですけれども、その行いは否定しているわけです。

マタイの福音書 7 章にも、イエス・キリストがこの偽教師を見分ける術というのを教えてくれております。**1 節**のところは皆さんお馴染みです。『**さばいてはいけません。さばかれたいからです。**』これはどのような意味においてもさばいてはいけない、という意味ではありません。同じ **7 章**の文脈で **15 節**のところを見て欲しいと思います。『**にせ預言者たちに気をつけなさい。彼らは羊のなりをしてやって来るが、うちは食欲な狼です。**』どのような意味においてもさばいてはいけない、という意味ではありません。特に **7 章**

1 節のさばいてはいけない。ギリシャ語では“クリノー”という言葉が使われていますが、特にそれは「罪に定める裁きを行ってはいけない。」という意味です。「あなたは地獄行きです。」というような裁きをしてはいけない。それは裁判官である神様が成すことであります。この人はクリスチャン、この人はノンクリスチャン。そしてノンクリスチャンは勿論神を知らなければ、そのまま地獄に堕ちてしまいますけれども、自ら地獄に行くことを選択するわけですけれども。中にはノンクリスチャンなのにまるでクリスチャンであるかのような、ノンクリスチャンであるのに牧師であるかのような、そのような偽教師・偽牧師が存在するわけです。彼らはしっかりと見分けて、要するに彼らをさばいて、判別する必要があるということです。

で、『にせ預言者たちに気をつけなさい。』とありますけれども、その見分け方は **16 節**に『あなたがたは、実によって彼らを見分けることができます。(実によって判別する。実によって裁くと。) ぶどうは、いばらからは取れないし、いちじくは、あざみから取れるわけがないでしょう。¹⁷ 同様に、良い木はみな良い実を結ぶが、悪い木は悪い実を結びます。』で、**20 節**に『こういうわけで、あなたがたは、実によって彼らを見分けることができます。』と。『²¹ わたしに向かって、『主よ、主よ。』と言う者がみな天の御国にはいるのではなく、天におられるわたしの父のみこころを行なう者がはいるのです。²² その日には、大ぜいの者がわたしに言うでしょう。『主よ、主よ。私たちはあなたの名によって預言をし、あなたの名によって悪霊を追い出し、あなたの名によって奇蹟をたくさん行なったではありませんか。』²³ しかし、その時、わたしは彼らにこう宣告します。『わたしはあなたがたを全然知らない。不法をなす者ども。わたしから離れて行け。』』

「この伝道者は、この牧師は、悪霊を追い出しました。奇蹟を行いました。癒しを行いました。人が救われています。聖書に書かれている通りではないけれども、でもそれは聖霊の働きではないですか。沢山の実がそこに認められるじゃないですか。」それは実ではありません。イエスの名も使われます。『主よ、主よ。』と叫びます。すべては父の御心を行う者が、良い実を結ぶわけです。父の御心を行わない、これは言い換えれば、御心と言うのはすべて神の言葉に揭示されておりますので、神の御言葉から外れるようなことを行っているならば、たとえそれが悪霊を追い出すような、たとえそれが奇蹟を行なうような、素晴らしいと人の目には思える、見える働きだったとしても、聖書から逸脱しているならば、それはすべて良い実ではありません。悪い実であります。私たちは実によって、本物の教師と偽物の教師、本物の預言者と偽物の預言者、本物の牧師と偽物の牧師を見分けることができます。

今日はこれで**テトスの 1 章**の学びを終えたいと思いますけれども、是非特に **1 章**で強調されていた御言葉のミニストリーというものを、これはこの教会、マラナサ・グレース・フェローシップでも私自身が最も重きを置いているところです。その証拠に日本一長い説教をここで私は提供しているわけですけれども、(自称ですので、もっと長く話しているところもあるかもしれませんが) でもその意味というものを是非皆さんにもう一度覚えて欲しいと思います。なぜ私がこんなにも御言葉をふんだんに、これでもかというほど語り続けるのか。又聖書以外のことを語ることを避けるのか。空想話だとか、又は空論に走るようなことをしないのか。是非考えて頂きたいと思います。そして皆さんもこのミニストリーを主から備えられて、それを担っていくようになるということも、是非期待して頂きたいと思います。御言葉によって養われ、丸々太った健康な羊になれば、あなたもまた沢山の子羊を生み出すようになります。ですから是非まず御言葉をいっぱい受けて下さい。もっと元気になって下さい。そして活力を得て、子羊を生み出すだけの力を得て下さい。御言葉の養いを受けずに、外に出て行って一生懸命伝道して、沢山の人を救いに導こうとしても、必ず行き詰まります。必ず失望します。クレテ人たちに。あなたの家庭にいるクレテ人に。あなたの親戚の中にいるクレテ人に。あなたの職場の中にいるクレテ人に。皆あなたは幻滅します。ガツカリします。そして落ち込んで、あなたのあの熱意はどこかへ吹っ飛んで冷めてしまいます。そういう時

にもう一度、御言葉に戻るべきであります。私たちも今日チャレンジされたと思いますので、是非ただ聞くだけの者ではなくて、御言葉を実行する者として、身近なところから始めてみてください。すべては家庭から始まります。夫婦の関係、親子の関係、そこから始まります。そこでうまくいけば、どこへ行ってもうまくいきます。保証します。家庭ほどミニストリーを行なうにおいて困難なところはありません。家庭で成功すれば、あなたの職場でも、教会でも、どこへ行っても成功します。それを励みにして下さい。「私の家庭は全然だめです。なっていません。クリスチャンホームなのに。」とか、「こんなにも長くクリスチャンをやっているのに、何も変わらないんです。」いろいろと自分の家庭を見て、「自分は全く不適合で、もう神様には用いて頂けないんじゃないか。」そのように失望している人もいます。すっかり落胆している人もいます。でも、あなたにはチャンスが与えられているということを覚えて下さい。いつまでもそこからスタートです。そこから神様があなたをさらに大きく用いたいと願っていますので、特にお子さんがある家庭、孫がもう与えられているという家庭、育てがいがああるわけです。ノンクリスチャンの家族に囲まれて今いる人たちも、ミニストリーのやりがいがああるわけです。是非、**テトスへの手紙**を通して励まされて欲しいと思います。

で、**2章**以降は、それぞれ教会に集まる老若男女たち、ここは老人の方が多いかもかもしれませんが、若い人も若干いますけれども、でも老人とはかくあるべきであると。男性、女性、そして若者たち。クリスチャンとしての在り方、姿勢というものが、またはっきりとストレートに語られておりますので、またそこを次回見て、御心ならば**2章3章**と次回で**テトスの手紙**を全部カバーできればと願っております。